

## 第89回ILO総会 「協同組合の促進」委員会

梅村敏幸（全国労働金庫労働組合連合 中央執行委員）



任務は、機関誌作成・HP記事集めなどです。

今年のILO総会において協同組合の議論が行われるので参加しないか、と連合から全労金にお声がかかり、5名いる専従役員のうち、定期大会議案書作成にそれほど関わらない私が唯一参加できる条件があった

3者会議採択（撮影：梅村敏幸）ことと、私が山好きのため、“ヨーロッパアルプス”に惹かれ「行きます」と名乗りをあげたのです。

### 私がILO総会に参加した経緯

私は6月5日から21日まで、スイス・ジュネーブで開催された第89回ILO総会の「協同組合の促進」委員会に、労働側委員として参加しました。

このように書くと、いかにも私自身がかなり協同組合の研究をしている労働組合役員であるかのようなイメージになりますが、実態はそうしたイメージとはかけ離れた「ふう」の人間であることを、まず白状いたします。

私は労働金庫の職員で、2年前から全国労働金庫労働組合連合会（全労金）という、全国の労働金庫に働く者で組織する労働組合の専従執行委員をしています。組織内での主な

### 協同組合との関わり

労働金庫は、「働く人の夢と共感を創造する協同組織の福祉金融機関（ろうきんの理念より）」です。そこで働く私たち職員は、当然協同組合と深く関わっているはずなのですが、職場で日常業務をこなしている中で「協同組合運動全般」について考える機会はありません。しかし、仕事を通じて「働く人たちに喜ばれること」が働きがいになっていることも確かで、そうした意識は協同組合運動の原点だと思います。

### 総会参加にあたってのスタンス



を作成しました。

3者会議の前にそれぞれのグループ会議が行われ、事務局案に対する修正案討議を行います。労働側グループの議長は南アフリカの Patel 氏で、議論の進め方・協同組合に関する知識共に、圧倒的に優秀な方でした。

Patel 氏は初めの労働グループ会議で、労働者側の獲得目標を以下の通り掲げました。

どの国でも適用できる普遍的な文書にする  
 協同組合の自主性・自立性を大切にする  
 協同組合に対し、公共のサポートを与える  
 (自主性を損なわない形で)

協同組合の労働者に、国際労働基準を適用させる

職員が経営の意志決定に関わるコーポレートガバナンスを確立させる

教育などの人的資源発掘を行う

協同組合における女性の地位促進を明言化する

広義のディーセントワークを協同組合に適用させ、明言化する

文書の中に他の ILO 文書(フィラデルフィア宣言など)を盛り込む

協同組合の国際的な連携に対する援助措置実効性のある文書にする

こうした明確な獲得目標に向け、労働グループは100以上の修正案を提出し、3者会議で討議されました。採択された草案は労働グループ議長・Patel 氏の大活躍で、これらの内容を反映したものとなり、我々労働側は「実りあるもの」と評価しました。

来年の総会に向けて

3者会議で圧倒された使用者グループは本

会議採択の場で、突然「過度に労働基準に触れ、挿入されたディーセントワークの定義も曖昧で憂慮する内容」との表明を行いました。

来年度の総会で勧告採択となるが、労働側グループと使用者側グループとの対立点は多く、いくつかの政府代表も、「断定的な文言を避け、できるだけシンプルな文書にすべき」との表明を行っています。

これに対し労働側グループは、今回参加の委員が互いに連絡を取り合い(Eメール・FAXなどを活用して)、今後1年間各国政府・使用者に働きかけ、我々にとって納得のゆく勧告採択のため全力を注ぐことを、最終の労働側グループ会議で確認しました。

私自身は来年のILO総会に参加するかどうか全くわかりませんが、労働グループが協同組合促進の推進者であることを目の当たりにして、とても誇りに思いました。と同時に、今後国内において、労働組合が「人を中心とする社会」実現のため、協同組合促進の対策を早急に講じる必要があると感じました。



Patel・梅村氏(撮影:梅村敏幸)